

妻と夫で生活満足度が乖離する要因は何か

——乖離要因の同一性と差異

色川 卓男

(静岡大学教育学部助教授)

1. はじめに

本稿では、妻と夫の間で生活満足度評価がズレている状況に焦点を当て、何が要因でそのズレが生じているのかを検討する。これまで多くの研究では、妻や夫のそれぞれの満足度が何によって決まるかという個別の規定要因を探る分析をしてきた。しかしそれでは妻と夫の間で満足度に差があった場合、どのような要因によってそれが生じているのかははっきりしないことになる。そこで本稿では特に妻と夫で満足／不満と明確に満足度がズレている2タイプを抽出し、それらを軸にどのような要因によってそれらが生じているのかを検討していくことにした。

2. 先行研究の概要

ところで妻や夫の生活満足度に関する研究は国内でも膨大な蓄積がある。しかしペアデータを利用した満足度のズレ（以下では乖離と呼ぶ）に関する先行研究はほとんど見あたらない。そこでここではまず乖離研究の参考にするため、簡単に生活満足度に該当する先行研究の知見を提示した上で、若干存在する乖離研究の知見を示し、本稿での分析視角を明示することにした。

まず生活満足度における個別の規定要因についての研究として、最近では木下（2004）によるものがある¹⁾。氏のレビューによると、満足度の規定要因として結婚年数、教育年数、世帯年収、健康状態、妻の就業形態、情緒的サポート、夫婦の

共同行動があげられており、特に夫婦の共同行動がともに大きな意味をもっているとしている。そしてライフステージ別に夫妻間の生活満足度を規定する要因が異なると指摘し、子どもがいる世帯では夫の家事参加頻度が高いと満足度も高まるとまとめている。また、本稿で用いるデータを利用した妻と夫を個別に行った生活満足度に対する分析（色川 2001）では、夫妻とも収入や資産などの経済変数や共同で行動している頻度が高く、さまざまな生活実態に対する認識が一致している者の満足度は高い。また全般的に妻の方で経済変数の影響が強く現れている。

以上のように生活満足度の個別規定要因を検討すると、社会的地位などの基本属性と共同性の有無が重要な位置を占めていることがわかる。

次に乖離研究をみていくと、わずかに土倉（2002, 2003）による夫婦関係の質について検討したものがある。氏によると、妻の就業いかんや夫の収入などの基本属性は評価の乖離の大きさはと関連をもたないと述べた上で、夫婦の会話時間が長いほど、妻は満足度も高くなるものの、夫はその影響を受けないという。その他、妻の満足度は夫のそれより一貫して低いことや夫が家庭に対して大きく関心の大きさは、夫婦関係に対する妻の満足度と夫の満足度の双方と正の関連をもつが、夫婦間での評価の乖離の大きさはと関係していないという。

土倉の分析はたいへん興味深いですが、本稿での主題は生活満足度であるので、夫婦関係の質評価で得られた知見がそのままあてはまるわけではない。実際に本稿で用いるデータ（5件法でレンジは1

～5点)では、妻の生活満足度(3.37, SD=1.15)は夫(3.43, SD=1.17)とほぼ近似しており、有意な差はみられず、土倉の利用したデータとは異なる特徴をもっている。

また、本稿で用いるデータを利用した生活満足度の乖離に対する分析(色川 2004)によると、基本属性では世帯年収や世帯資産が高いと乖離が少ないという傾向が若干みられるが、特に影響を及ぼしているのは家計状況認知と夫の能力評価と「私がイライラする」であった。つまりこれらに対する主観的評価が夫妻間で乖離しているほど、妻と夫の満足度も乖離が大きくなることになる。しかしここでいう満足度の乖離に関する分析は、ただ「乖離」を問題にしたもので、本稿で行うような乖離タイプを考慮した分析ではない。

これらの研究成果からまとめると、生活満足度の重要な個別規定要因として収入や学歴、妻の就業形態などの基本属性、他の満足度変数、健康状態、情緒的サポートなどの互いの相手に対する評価、レジャーや会話などの夫妻の共同行動に対する認知状況があげられる。そして乖離を問題にする場合には、基本属性があまり効かず、経済状態や互いに対する主観的評価の乖離が大きな影響を及ぼすのではないかと予測される。そして本稿では、その乖離の要因がタイプ別に異なるのかどうかを探ることになる。

3. データと分析方法

(1) データ

利用するデータは1999年に実施された家計経済研究所「現代核家族調査」である。この調査は同一世帯の夫と妻と子というトリプルデータがとれるという優れた特徴をもっている。できれば子どもの回答があるケースに絞って親子関係の分析も加えたかったが、そうなると全体で564ケースと大幅にケース数が減少し、計量分析に耐えられないおそれがあったので、本稿では子どもの回答の有無を考慮せず、子どもがいる世帯の夫と妻のペアデータのみを利用して分析を行った。妻と夫の満足度データがあるのは814ケース(ペアデータ

なので814組)であるが、後述するような4グループに分けると736ケースが対象となる。ただし各項目に無回答などがあるため、個々の分析でのケース数はこれより減少している場合がある。

(2) 変数

ここで用いる生活満足度とは「あなたは生活全般に満足していますか」という問いに対して、「満足」、「まあ満足」、「やや不満」、「不満」、「どちらともいえない」、「わからない」、の6件法からなる。これらのうち「満足」、「まあ満足」を合わせて「満足」、「やや不満」、「不満」を合わせて「不満」とした。「どちらともいえない」、「わからない」は分析から除外した。

従属変数として、妻と夫の生活満足度を4タイプに分けたものを利用した。ともに「満足」(以下ではSSと略す)422ケース、妻「満足」/夫「不満」(以下ではSDと略す)88ケース、妻「不満」/夫「満足」(以下ではDSと略す)108ケース、ともに「不満」(以下ではDDと略す)118ケースである。

これまでの先行研究の成果をふまえて、独立変数として基本属性、他の満足度、生活状況認知、情緒的サポート、ストレス、性別役割規範、共同行動の各項目に関係する変数を利用した。全体的にはプラス評価と考えられる結果の点数を高く、マイナス評価にあたる変数の点数が低くなるよう、統一した。詳しくは以下の通りである。

(a) 基本属性

あまり相関はみられないと考えられるが、確認のため基本属性をあげた。基本属性として世帯年収、世帯資産、妻年収、持ち家の有無、部屋数、テレビ台数、電話台数、妻年齢、夫年齢、妻教育年数、夫教育年数、結婚年数、長子年齢を取り上げた。これらの記述統計は図表-1の通りである。

(b) 満足度

他の満足度は4変数からなる。まず仕事満足、収入満足、夫婦関係満足は「あなたは現在の何々に満足していますか」という質問に対して、生活

図表-1 基本属性の記述統計量

タイプ		SS	DD	DS	SD
	ケース数	ともに「満足」	ともに「不満」	夫「満足」、 妻「不満」	妻「満足」、 夫「不満」
世帯年収(万円)	712	906.9	617.7	714.2	837.2
世帯資産(万円)	706	2300.6	1210.2	1466.3	1741.1
妻年収	731	125.4	83.1	97.0	160.9
持ち家(=1)	727	0.7	0.5	0.6	0.6
部屋数	736	4.1	3.4	3.7	3.9
テレビ台数	736	2.2	2.1	2.1	2.4
電話台数	736	2.2	1.9	2.1	2.1
妻年齢	736	39.4	39.6	39.4	38.8
夫年齢	736	42.1	42.3	42.3	41.3
妻教育年数	735	13.5	12.8	13.4	13.3
夫教育年数	728	14.3	13.5	13.9	14.0
結婚年数	735	13.6	13.6	13.6	13.0
長子年齢	736	11.2	11.3	11.4	10.6

満足度と同様の6件法である。それぞれの満足度に対して「満足」5点、「まあ満足」4点、「やや不満」2点、「不満」1点、「どちらともいえない」3点として、「わからない」は分析から除外した。結婚生活の期待と現実とは「あなたにとって、ご主人(奥様)との結婚生活は期待どおりのものでしょうか」に対して、「期待以上」(5点)、「期待どおり」(4点)、「まあ期待どおり」(3点)、「やや期待はずれ」(2点)、「期待はずれ」(1点)の5件法である。

(c) 生活状況認知

生活状況認知は6変数からなる。現在の家事育児分担頻度は料理、料理後かたづけ、掃除、洗濯、子どもの世話などの5つの変数からなり、各6件法で構成されている。「まったくしない」は(0)、「1カ月に2、3回」は(2.5)、「週に1回」は(4.5)、「週に2、3回」は(11.25)、「週に4、5回」は(20.25)、「ほぼ毎日」は(29.25)としてそれぞれ換算し、5つの変数を合計した($\alpha = .72$)。これまでの妻家事育児分担割合と妻の資産貢献度は何割という数値で出ている。現在の家計状況については「ゆとりがある」(4点)、「まあゆとりがある」(3点)、「やや苦しい」(2点)、「苦しい」(1点)、「わからない」という5件法で構成されており、「わからない」は分析から除外している。「家庭の円満のために、お金の使い途

については黙っている」と「家族の生活費のために、自分のために使うお金を切り詰める」という各質問に対して、「よくある」(1点)、「時々ある」(2点)、「たまにある」(3点)、「全くない」(4点)の4件法で構成されている。いずれもない方がプラスの意味になるので、「全くない」を最高点にした。

(d) 情緒的サポート

情緒的サポートは4変数からなる。「夫(妻)は私の心配事や悩みを聞いてくれる」、「私は夫(妻)の心配事や悩みを聞いてあげる」、「夫(妻)は私の能力や努力を評価している」、「私は夫(妻)の能力や努力を評価している」という質問に対して、「あてはまる」(4点)、「ややあてはまる」(3点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「あてはまらない」(1点)の4件法から構成されている。

(e) ストレス

ストレスは3変数からなる。「夫(妻)は私のすることに文句や小言をいう」、「夫(妻)は私にいろいろと面倒をかける」、「夫(妻)といるとイライラすることがある」というそれぞれの質問に対して、「あてはまる」(1点)、「ややあてはまる」(2点)、「あまりあてはまらない」(3点)、「あてはまらない」(4点)の4件法で構成されている。この項目もあてはまらない方がプラスの意味があるので、「あてはまらない」を最高点にした。

(f) 性別役割規範

性別役割規範は以下の5変数からなる。「子どもが小さいうちは、母親は仕事を持たず育児に専念すべきだ」、「夫は家族のために収入を得る責任をもつべきだ」、「妻は家族のために家事や育児をする責任をもつべきだ」という質問に対して、

図表-2 生活満足度タイプ×基本属性との相関係数

	SS		DD		DS		SD	
	妻満足・夫満足		妻不満・夫不満		妻不満・夫満足		妻満足・夫不満	
		p		p		p		p
世帯年収	0.25	***	-0.23	***	-0.12	**	0.01	
世帯資産	0.20	***	-0.15	***	-0.09	*	-0.03	
妻年収	0.03		-0.07		-0.04		0.07	
持ち家(=1)	0.17	***	-0.15	***	-0.05		-0.03	
部屋数	0.17	***	-0.17	***	-0.06		0.00	
テレビ台数	0.03		-0.06		-0.03		0.06	
電話台数	0.09	*	-0.10	**	0.00		-0.03	
妻年齢	0.01		0.03		0.01		-0.07	
夫年齢	0.01		0.02		0.02		-0.06	
妻教育年数	0.11	**	-0.14	***	0.01		-0.01	
夫教育年数	0.11	**	-0.12	**	-0.03		-0.01	
結婚年数	0.02		0.01		0.01		-0.04	
長子年齢	0.01		0.01		0.02		-0.05	

***はp<0.001, **はp<0.01, *はp<0.05

点)、「ほとんど話さない」(2点)、「全く話さない」(1点)という6件法で構成されている。年間レジャー全体延べ回数は「休日、あなたは次のような形で、どの程度レジャーのため外出しますか」と「休日、あなたは次のような形でどの程度、自宅でレジャーや趣味を楽しんでいますか」という質問の中に、「夫婦と子どもで」、「夫婦二人で」とい

「それぞれ賛成」(4点)、「まあ賛成」(3点)、「やや反対」(2点)、「反対」(1点)の4件法で構成されている。また就業意識ではプラス要因と考えられる「家計にゆとりができる」「妻の能力や知識がいかせる」、「妻が社会とのつながりがもてる」、「子どもが自立する」、「私が自立する」、「妻(夫)が自立する」の6変数($\alpha=.74$)は「あてはまる」(4点)、「ややあてはまる」(3点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「あてはまらない」(1点)までの4件法であるが、それらを集計したものを妻就業意識長所とした。同様にマイナス要因と考えられる「子どものしつけがいきとどかない」、「近隣や友人との付き合いが充分にできない」、「私(妻)が仕事と家事の負担でイライラする」、「妻(私)が家事を手抜きする」の4変数($\alpha=.77$)は同じく4件法で構成されているが、その点数を逆にした値を集計したものを妻就業意識短所とした。

(g) 共同行動

共同行動は3変数からなる。平日朝食回数は「この1週間に家族全員で朝食(夕食)をとったのは何回ですか」という質問に対して、その回数を答えたものである。夫婦会話量は「あなた方ご夫婦は、どのくらい会話をしていますか」という質問に対し、「よく話す」(6点)、「話す」(5点)、「まあ話す」(4点)、「あまり話さない」(3

点)、「ほとんど話さない」(2点)、「全く話さない」(1点)という6件法で構成されている。年間レジャー全体延べ回数は「休日、あなたは次のような形で、どの程度レジャーのため外出しますか」と「休日、あなたは次のような形でどの程度、自宅でレジャーや趣味を楽しんでいますか」という質問の中に、「夫婦と子どもで」、「夫婦二人で」という分類があり、「毎週のように」(54点)、「1カ月に2、3回」(30点)、「1カ月に1回」(12点)、「2、3カ月に1回くらい」(45点)、「ほとんど出かけない」(1点)までの5件法で構成されている。これら4つの変数を順次、点数化し、それらを集計した。

(3) 方法

まず従属変数である満足度4タイプと各独立変数との相関係数を検討する。そこで特に要因としての重要性がみられた独立変数を抽出し、その変数に対する妻回答と夫回答の差(妻回答-夫回答)で構築した変数を乖離変数として設定し、再び満足度4タイプとの相関係数を検討する。さらに相関が強いと考えられる変数を抽出し、ロジスティック回帰分析を行い、最終的にDSタイプ(妻不満・夫満足)とSDタイプ(妻満足・夫不満)の要因を中心に、比較検討する。

4. 分析

(1) 基本属性

一致タイプであるSSタイプとDDタイプでは多くの変数で相関があり、予想どおり、対称的な関係となっている(図表-2)。しかし乖離タイプではDSタイプだけで世帯年収(-0.12, $p<0.01$)と世帯資産(-0.09, $p<0.05$)との負のわずかな相

図表-3 生活満足度タイプ×他の満足度との相関係数

	SS(妻満足・夫満足)		DD(妻不満・夫不満)		DS(妻不満・夫満足)		SD(妻満足・夫不満)	
	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫
	p	p	p	p	p	p	p	p
仕事満足	0.31 ***	0.32 ***	-0.25 ***	-0.28 ***	-0.17 ***	0.03	-0.01	-0.22 ***
収入満足	0.46 ***	0.34 ***	-0.33 ***	-0.27 ***	-0.23 ***	-0.04	-0.07	-0.17 ***
夫婦関係満足	0.41 ***	0.37 ***	-0.35 ***	-0.40 ***	-0.26 ***	0.03	0.06	-0.15 ***
結婚期待どおり	0.42 ***	0.33 ***	-0.36 ***	-0.32 ***	-0.25 ***	-0.02	0.04	-0.12 ***

***はp<0.001、**はp<0.01、*はp<0.05

図表-4 生活満足度タイプ×生活状況認知との相関係数

	SS(妻満足・夫満足)		DD(妻不満・夫不満)		DS(妻不満・夫満足)		SD(妻満足・夫不満)	
	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫
	p	p	p	p	p	p	p	p
夫家事育児分担頻度	0.11 **	0.08 *	-0.05	-0.04	-0.06	-0.06	-0.05	-0.02
これまで妻家事分担割合	-0.12 **	-0.03	0.10 *	0.04	0.05	0.00	0.02	0.01
妻の資産貢献度	-0.07	-0.04	0.08	0.02	0.02	0.08 *	-0.01	-0.04
家計状況認知	0.44 ***	0.40 ***	-0.35 ***	-0.35 ***	-0.19 ***	-0.09 *	-0.06	-0.11 **
お金の使い途については黙る	0.23 ***	0.13 **	-0.16 ***	-0.15 ***	-0.07	-0.01	-0.06	0.05
自分のために使うお金を切り詰める	0.21 ***	0.12 **	-0.19 ***	-0.10 **	-0.14 ***	-0.02	0.01	-0.01

***はp<0.001、**はp<0.01、*はp<0.05

図表-5 生活満足度タイプ×情緒的サポートとの相関係数

	SS(妻満足・夫満足)		DD(妻不満・夫不満)		DS(妻不満・夫満足)		SD(妻満足・夫不満)	
	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫
	p	p	p	p	p	p	p	p
夫は心配事を聞いてくれる(聞く)	0.25 ***	0.20 ***	-0.25 ***	-0.18 ***	-0.14 ***	-0.06	0.06	-0.02
夫は妻の能力や努力を評価	0.27 ***	0.21 ***	-0.28 ***	-0.18 ***	-0.11 **	-0.04	0.02	-0.07 *
妻は夫の心配事を聞く(聞いてくれる)	0.11 **	0.21 ***	-0.06	-0.19 ***	-0.10 **	-0.02	0.00	-0.08 *
妻は夫の能力や努力を評価	0.24 ***	0.31 ***	-0.28 ***	-0.29 ***	-0.08 *	-0.01	0.04	-0.13 **

***はp<0.001、**はp<0.01、*はp<0.05

関がみられるだけである。

次に満足度4タイプと夫妻就業4タイプ(夫常勤・妻専業主婦、夫常勤・妻常勤、夫常勤・妻パート、夫自営・妻自営)について χ^2 (カイ)二乗検定を行ったが、就業タイプと満足度タイプとは有意な関連がなかった($\chi^2=6.84, p=ns$)。

以上、基本属性からまとめると、一致タイプはかなり基本属性の影響を受けている。しかし乖離タイプは一致タイプとは異なり、基本属性の影響をほとんど受けない。ただし、妻が「不満」である乖離タイプの場合には、同じ世帯年取の夫のそれよりも、家計実態に対する評価が厳しいといえる。

(2) 満足度

当然のことながら、ほとんどの変数で有意となっている(図表-3)。SSタイプはともに正の相関、DDタイプはともに負の相関、DSタイプは妻側で負の相関、SDタイプで夫側に負の相関となっている。詳細にみると、仕事満足では若干、夫の方が相関が高く、収入満足と結婚期待どおりでは妻側が高い。夫で結婚期待どおりの係数が低いのは、DDタイプのようにはっきりとした不満でない限り、期待どおりであろうとなかろうと、生活満足度にはそれほど影響しないことを示唆している。

図表-6 生活満足度タイプ×ストレスとの相関係数

	SS(妻満足・夫満足)		DD(妻不満・夫不満)		DS(妻不満・夫満足)		SD(妻満足・夫不満)	
	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫
	p	p	p	p	p	p	p	p
夫(妻)が文句を言う	0.10 **	0.04	-0.10 **	-0.05	-0.01	0.04	-0.02	-0.05
夫(妻)が面倒をかける	0.15 ***	0.00	-0.13 ***	0.00	-0.11 **	0.04	0.03	-0.05
夫(妻)にイライラする	0.28 ***	0.15 ***	-0.23 ***	-0.16 ***	-0.17 ***	0.06	0.01	-0.09 *

***は $p < 0.001$, **は $p < 0.01$, *は $p < 0.05$

図表-7 生活満足度タイプ×性別役割規範との相関係数

	SS(妻満足・夫満足)		DD(妻不満・夫不満)		DS(妻不満・夫満足)		SD(妻満足・夫不満)	
	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫
	p	p	p	p	p	p	p	p
三歳児神話	0.07 *	0.03	-0.01	-0.04	0.00	0.03	-0.11 **	-0.04
夫稼得役割	-0.10 **	0.10 **	0.14 ***	-0.07	-0.01	0.02	0.00	-0.10 **
妻家事育児責任	0.12 **	-0.04	-0.04	0.06	-0.07	0.01	-0.06	-0.01
妻就業意識長所得点	-0.02	0.00	0.01	-0.01	0.01	0.04	0.00	-0.03
妻就業意識短所得点	-0.01	0.07	-0.01	-0.09 *	0.02	0.07	0.01	-0.08 *

***は $p < 0.001$, **は $p < 0.01$, *は $p < 0.05$

図表-8 生活満足度タイプ×共同行動との相関係数

	SS(妻満足・夫満足)		DD(妻不満・夫不満)		DS(妻不満・夫満足)		SD(妻満足・夫不満)	
	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫
	p	p	p	p	p	p	p	p
平日朝食回数	0.13 **	0.11 **	-0.06	-0.06	-0.08 *	-0.05	-0.04	-0.05
夫婦会話量	0.30 ***	0.31 ***	-0.26 ***	-0.25 ***	-0.13 ***	-0.03	-0.02	-0.14 ***
レジャー共同性得点	0.22 ***	0.26 ***	-0.22 ***	-0.16 ***	-0.08 *	-0.06	0.00	-0.15 ***

***は $p < 0.001$, **は $p < 0.01$, *は $p < 0.05$

(3) 生活状況認知

次に夫妻間で生活状況をどのように把握しているのかという点から検討していく(図表-4)。まず一致タイプでは家計状況認知、お金の使い方は黙る、自分のために使うお金を切り詰めるでは、対称的な動きをしており、いずれも有意な相関となっているが、幾分異なる点もある。SSタイプの妻では夫家事分担頻度(0.11, $p < 0.01$)とこれまでの妻家事分担割合(-0.12, $p < 0.01$)で若干、相関がみられ、ともに満足タイプの場合には夫が家事育児分担を担うものほど、このタイプに近づくことになる。しかしDDタイプではこの動きはみられない。つまり夫の家事育児分担が高いと、ともに満足タイプに近づくが、低いからといって、ともに不満が増えるともいえない。

一方、DSタイプでは家計状況認知で夫妻ともわずかに負の相関(妻-0.19, $p < 0.001$; 夫-0.09, $p < 0.05$)があり、妻だけで自分のためにお金を切

り詰めることがある(-0.14, $p < 0.001$)ほど、このタイプに接近する。

SDタイプでは夫の家計状況認知だけで負のわずかな相関がみられる(-0.11, $p < 0.01$)。つまり家計状況認知はどちらにしても影響を及ぼすが、自分のお金を切り詰めることは妻側でのみマイナスの影響が出ていることになる。

以上をまとめると、どの生活満足度タイプにも影響を及ぼすのは家計状況認知である。家事育児分担等の認知は、SSタイプ以外では満足度に影響を及ぼしていない。

(4) 情緒的サポート

SSやDDの一致タイプでは、ほとんどの変数で有意となっており、対称的な結果となっている(図表-5)。DSタイプの妻ではどれも負のわずかな相関がみられる。SDタイプの夫では夫は心配事を聞いてくれる以外で負のわずかな相関がみられる。乖離タイプでは夫妻とも相手側の自分に対す

図表-9 生活満足度タイプ×乖離変数との相関係数

	SS		DD		DS		SD	
	妻満足・夫満足		妻不満・夫不満		妻不満・夫満足		妻満足・夫不満	
		p		p		p		p
仕事満足乖離	-0.13	***	0.05		0.04		0.07	
収入満足乖離	0.04		-0.11	**	0.03		0.06	
夫婦関係満足乖離	-0.21	***	0.01		0.26	***	0.02	
結婚期待どおり乖離	-0.05		-0.03		0.14	***	-0.05	
資産貢献度差	-0.13	***	0.07		0.07		0.01	
家計状況認知差	-0.04		-0.06		0.04		0.10	**
自分のために使うお金を切り詰める差	-0.15	***	0.10	**	0.11	**	0.00	
妻の心配事を聞く乖離	-0.12	***	0.05		0.04		0.06	
妻の能力評価乖離	-0.14	***	0.05		0.13	***	0.01	
夫の心配事を聞く乖離	-0.04		-0.03		0.05		0.02	
夫の能力評価乖離	-0.14	***	0.00		0.07	*	0.13	***
私に面倒をかけない乖離	-0.12	***	0.07		0.12	**	-0.02	
私がイライラしない乖離	-0.13	***	0.00		0.18	***	-0.01	
三歳児神話乖離	-0.10	**	0.02		0.06		0.06	
夫稼得役割乖離	-0.05		-0.02		-0.01		0.10	**
妻家事育児責任乖離	-0.12	***	0.03		0.06		0.05	
妻就業意識短所乖離	0.00		-0.07		0.05		0.01	
家族全員での平日朝食回数乖離	-0.08	*	0.06		0.07		0.01	
夫妻会話量乖離	-0.09	**	0.00		0.07		0.06	
レジャー共同性年間回数乖離	0.04		-0.08	*	-0.01		0.06	

***はp<0.001, **はp<0.01, *はp<0.05

る評価や自分への対応に対する不満が生活満足度の乖離を招いていると考えられる。

(5) ストレス

SSとDDの一致タイプでは有意な変数は対称的になっており、SSタイプでは妻からみると夫は文句を言わず(0.10, p<0.01)、面倒をかけず(0.15, p<0.001)にイライラさせられない(0.28, p<0.001)ほど、このタイプに接近する(図表-6)。夫は妻にイライラさせられない(0.15, p<0.001)ほど、SSタイプに近づき、逆(-0.16, p<0.001)だとDDタイプに近づく。

DSタイプでは妻からみると、夫が面倒をかけた(-0.11, p<0.01)、イライラさせたり(-0.17, p<0.001)する一方、夫側では妻に対してそう思っていない場合にこのタイプに接近する。他方、SDタイプでは夫が妻にイライラさせられる(-0.09, p<0.05)一方、妻側では夫に何も思っていない場合にはこのタイプに接近する。換言すれば、妻と夫が相手に対するストレス感に非対称性があると、この乖離タイプに接近することになる。

(6) 性別役割規範

全体をみると有意な変数はそれほど多くはない(図表-7)。SSタイプでは夫が稼得役割を担うべきだと考えている意識が妻で低く、夫で高いほど(妻-0.10, p<0.01; 夫0.10, p<0.01)、このタイプに接近する。また妻で家事育児責任の意識が高い(0.12, p<0.01)ほど、同様に接近する。DDタイプでは夫に稼得役割意識をもってほしいと考えている妻(0.14, p<0.001)ほど、このタイプに接近し、妻の就業がマイナスだと考えていない夫(-0.09, p<0.05)ほど、このタイプに接近する。

DSタイプでは性別役割規範と特に有意な関係性を持つ変数はなく、SDタイプでは三歳児神話を信じている妻(-0.11, p<0.01)ほど接近せず、夫自らに稼得役割の意識がない夫(-0.10, p<0.01)ほど、このタイプに接近する。妻の就業がマイナスだと思っていない夫(-0.08, p<0.05)ほど、わずかに同様の相関がみられる。

まとめると、生活満足度タイプと性別役割規範はそれほど相関はみられない。ただしSDタイプでは、性別役割規範に対する意識が若干、影響を及ぼしている。

図表-10 DS(妻「不満」・夫「満足」)を従属変数とするロジスティック回帰

	B	標準誤差	Wald	自由度	p	オッズ比
定数	-2.135	0.364	34.470	1		
世帯年収	-0.001	0.000	7.528	1	**	0.999
お金を切り詰める乖離	0.248	0.120	4.279	1	*	1.282
妻の能力評価乖離	0.374	0.158	5.584	1	*	1.454
イライラする乖離	0.649	0.140	21.351	1	***	1.913

-2対数尤度 449.87

***は $p<0.001$ 、**は $p<0.01$ 、*は $p<0.05$

図表-11 SD(妻「満足」・夫「不満」)を従属変数とするロジスティック回帰

	B	標準誤差	Wald	自由度	p	オッズ比
定数	-2.562	0.202	160.875	1		
家計状況認知差	0.432	0.206	4.389	1	*	1.541
夫の能力評価乖離	0.552	0.179	9.470	1	**	1.737

-2対数尤度 428.68

***は $p<0.001$ 、**は $p<0.01$ 、*は $p<0.05$

(7) 共同行動

SSとDDの一致タイプでは、ともに相関がみられる変数が多い(図表-8)。夫婦会話量とレジャー共同性得点では対称的な関係となっているものの、平日朝食回数ではDDタイプには相関がない非対称な関係となっている。

DSタイプでは妻側にすべての変数で負のわずかな相関がみられ、SDタイプでは夫側に夫婦会話量(-0.14, $p<0.001$)とレジャー共同性得点(-0.15, $p<0.001$)で負のわずかな相関がみられる。

以上をまとめると、いずれの変数も共同性を高めることによって生活満足度が上昇するようだが、とりわけ夫婦会話量の影響が夫妻とも大きいといえるだろう。

(8) 乖離変数

ここまでの各変数で、特に相関がみられた変数をもとに、その乖離変数(|妻回答-夫回答|)を加工し、生活満足度4タイプの相関をみた(図表-9)。ここでは絶対値による乖離の大きさと生活満足度各タイプとの相関をみている。乖離が大きくなればなるほど、そのタイプに近づくならば正の相関、逆ならば負の相関となる。

まず生活満足度4タイプすべてと有意な相関がみられる変数はない。SSタイプでは負の相関がみられる変数が多くなっている。これはそれだけ各変数で乖離が起きていると、ともに満足という

状態にならないことが示唆されている。

次にDSタイプでは夫婦関係満足(0.26, $p<0.001$)と結婚期待どおり(0.14, $p<0.001$)、自分のために使うお金を切り詰める(0.11, $p<0.01$)、妻の能力評価(0.13, $p<0.001$)、夫の能力評価(0.07, $p<0.05$)、私に面倒をかけない(0.12, $p<0.01$)、私をイライラさせない(0.18, $p<0.001$)で、いずれも正の相関になっている。つまりこれら変数で乖離が大きくなればなるほど、このタイプに近づくことになる。前項までの結果から推察すると、妻側で評価が低下していくとこれが生ずることになる。

反対のSDタイプでは、家計状況認知(0.10, $p<0.01$)、夫の能力評価(0.13, $p<0.001$)、夫稼得役割(0.10, $p<0.01$)で乖離が大きくなればなるほど、このタイプに近づくことがわかる。ここも同様に、これらの変数で夫の評価が低いとこれが生ずることになる。

以上からみると、SSタイプになるには、乖離しないことが重要である。DSとSDの乖離タイプでは共同行動に対する評価の乖離は問題にならず、また乖離の相関がみられた変数もほとんど一致しない。

(9) ロジスティック回帰

前項までの結果をふまえて、特に相関がみられる世帯年収および乖離変数を抽出し、尤度比変数増加法によるロジスティック回帰分析を行った。

まず従属変数がDSタイプ（妻不満・夫満足）だと（図表-10）、自分の使うお金を切り詰めることに対する乖離や妻の能力に対する評価に対する乖離が拡大したり、相手に対するイライラ感に対する乖離が拡大したりすると、このタイプに接近する。特にイライラの乖離による影響は大きく、乖離が1広がると1.9倍このタイプに近づくことになる。世帯年収も乖離の大きさとほぼ同様の影響を及ぼしている。

他方、従属変数がSDタイプ（妻満足・夫不満）だと（図表-11）、家計状況の認知差が拡大したり、夫の能力評価に対する乖離が拡大したりすると、このタイプに接近する。特に夫の能力評価での乖離が1広がると1.7倍、このタイプに近づくことになる。

図表はあげないがSSタイプ（ともに満足）、DDタイプ（ともに不満）とも同様の分析を行った。DDタイプで自分の使うお金を切り詰めることに対する乖離が1大きくなると1.2倍このタイプに近づく関係以外は特に目立った効果はみられなかった。

以上の結果からみると、SDタイプになる主要な要因は他の満足度の影響やストレスの乖離にあり、DSタイプでは経済的状況の認知の乖離がそれにあたる。また、どちらにも共通しているのは、自分に対する相手の評価と自己評価とに乖離があると、どちらかのタイプになるということである。

5. まとめ

以上の結果を先行研究と比較すると、本稿の結果でも基本属性の影響をほとんど受けないこと、また乖離する要因として特に大きな影響を及ぼしているのは「家計状況認知」、「夫の能力評価」と「私がイライラすること」ではほぼ一致する。

本稿の結果から新たに付け加わった知見は、第1に互いの能力評価に対する乖離はどちらのタイプにせよ、重要な生活満足度の乖離要因であること、第2に家計状況認知の乖離はSDタイプで、第3にイライラや自分のお金を切り詰めることに対する乖離はDSタイプでそれぞれ乖離をもたらす要因であること、以上3点である。

以上から結局、何がいえるだろうか。本稿で生活満足度が乖離するのは片方が満足のままなのに、片方が何かの要因に不満をもつからこそ、乖離が生ずるのである。言い換えると、片方が不満をもっているのに他方はそれに気がつかないことになる。それだけにDSタイプは妻の不満に気づいていない夫の状態が、SDタイプでは夫の不満に気づいていない妻の状態が現れていたといえる。ともに自分の能力が（相手にある程度評価されているのに）相手に評価されていないと思ひこみ、妻が夫にイライラし、日々のお金を切り詰めることが多くなっていることには夫は気づかず、夫が家計状況に対して苦しいという評価をしていることには妻が気づいていないということだろう。例えば現在は夫妻ともに満足している全体の6割弱いる世帯に、上記した変数の乖離が生ずると生活満足度も乖離していく可能性があるということである。

しかしそもそも妻と夫は日常的にさまざまな形で関わっている以上、互いに影響を及ぼすような相互作用があると考えられる。例えば、ともに満足である妻と乖離タイプで満足の妻とはどちらも満足ではあるが、その意味が異なるかもしれない。夫が不満であることを満足の妻もうすうす気づいていて、その影響がどこかに現れているかもしれないのである。この妻と夫の間にみられる生活満足評価に対する相互作用の意味も今後は実証的に検討する必要があるだろう。

またSDタイプでは夫婦関係満足の乖離が生活満足度のタイプに影響を及ぼしていなかったが、夫の生活満足度を規定する要因が、夫婦関係に対する評価だけでは収まりきれない可能性を示唆している。個別に規定要因を検討した際（色川 2001）には、ともに相関係数が高く（妻.538, 夫.479）、このようなことは現れなかった。なぜ本稿ではこのような結果が出てきたのか、これも今後、検討する必要があるだろう。

いずれにしても、本稿では全般的に相関係数も低く、残念ながらここで得た結論もわずかな可能性を示したにすぎない。しかし今回の結果を仮説として活かし、上記した課題を検討していきたい。

注

1) なお木下は結婚満足度を検討しているが、それは本稿でいう生活満足度と同一変数である。

文献

色川卓男, 2001, 「妻と夫の生活満足度を規定する要因について」『季刊家計経済研究』49: 36-43.

———, 2004, 「夫妻間で生活満足度がズレる要因は何か」財団法人ハイライフ研究所編『現代家族のライフスタイルとストレス』財団法人ハイライフ研究所, 25-36.

木下栄二, 2004, 「結婚満足度を規定するもの」渡辺秀樹ほか編『現代家族の構造と変容』東京大学出版会, 277-291.

土倉玲子, 2002, 「夫婦関係の質とコミュニケーション」北海道大学2002年度博士論文要旨 (http://lynx.let.hokudai.ac.jp/lab/papers/doctoral_thesis/tsuchikura_d.html, 2004.8.6).

———, 2003, 「夫婦関係の質評価における夫婦間乖離とコミュニケーション」日本社会心理学会2003年度発表論文 (http://dbl.wdc-jp.com/cgi-bin/jssp/wbpnew/master/detail00.php?submission_id=2003-D-0019, 2004.8.6).

Bradbury, T. N., Fincham, F. D., and Beach, S. R. H., 2000, "Research on the Nature and Determinants of Marital Satisfaction: A Decade in Review," *Journal of Marriage and the Family*, 62: 964-980.

いろいろ・たくお 静岡大学教育学部助教授。主な論文に「女性の幸福感はどう変化しているか」(樋口美雄・太田清・家計経済研究所編『女性たちの平成不況』日本経済新聞社, 2004)。生活経済学専攻。

家計経済研究所の本

樋口美雄・太田清・家計経済研究所編
『女性たちの平成不況』

日本経済新聞社 2004年4月刊行 1890円(税込)

《 長引く不況と社会環境の多様化で、
女性の労働・結婚・育児・生活観はどう変化したかを、
10年に及ぶデータに基づき、様々な角度から浮き彫りにする。 》



(財)家計経済研究所が実施している「消費生活に関するパネル調査」は、1993年の調査開始から既に10年のデータを蓄積しています。

このたび、毎年公刊している報告書とは別に、この10年のデータについての研究成果として、『女性たちの平成不況』が日本経済新聞社から公刊されました。

一般の書店で好評発売中です。